

# マイクロ金融機関の経営特性の国際比較： —DEAと主成分分析を利用したカンボジアとフィリピンの事例—

奥田英信 一橋大学  
外山雄介 一橋大学大学院生

市場経済制度と複数政党制を持つ東南アジア諸国の中で、カンボジアとフィリピンは、マイクロ金融機関（microfinance institutions、以後 MFIs と略称）が発達した国である。The Economic Intelligence Unit Limited のマイクロ金融機関に関する世界ランキングによれば、全般的ビジネス環境に関したフィリピンとカンボジアは 4 位と 8 位、監督制度に関して 2 位と 6 位で、高い評価を受けている（Habaradas et al., 2013）。

カンボジアとフィリピンのマイクロ金融機関の経営環境にはかなりの違いがみられる。雨森（2010）によれば、カンボジアの MFIs は全体の傾向として持続的経営をより重視する経営特性を強めており、金融機関の成長とともに貧困層への金融サービス提供の比重が低下しつつある。カンボジア政府は、金融制度を整備するという観点から MFIs が成長し商業銀行に転換することも期待しているともいわれ、貧困層へのサービス提供と金融機関の持続的発展とのバランスが今後どう変化するのが興味がもたれている。一方、フィリピンではカンボジアに比較して既に一定水準の金融制度が整備されていることから、MFIs が新たに商業金融機関に発展することは期待されておらず、またその可能性も小さい。また、非営利のマイクロ金融機関の役割が大きく MFIs の経営目的は収益性よりも貧困削減を重視する傾向があると指摘されている。

本稿は、MIX（Microfinance Information Exchange）のデータベースに Gutierrez-Nieto（2007）の手法を適用して、カンボジアとフィリピンの MFIs の経営特性を比較検討した。カンボジアとフィリピンの MFIs の比較研究には湯川（2009）があるが、本稿では使用データを最新のものにすると同時に、分析方法の改善を試みた。即ち、投入要素と産出物の選択について、より経済学的に合理性のある変数に改めると同時に、効率性の計測において収穫一定（CRS）だけでなく収穫変動（VRS）の場合も仮定してより一般的な計測を行った。

分析結果は湯川（2009）の結果と異なり、両国間で対照的な経営特性の違いが見られた。即ち、第 1 にカンボジアの MFIs は Sustainability 傾向が強いのにに対して、フィリピンの MFIs は Outreach 傾向が強かった。第 2 にカンボジアでは規模が大きい MFIs は規模の小さい機関よりも総合効率性が高い傾向があるが、フィリピンではそのような傾向は見られなかった。第 3 にカンボジアでは MFIs は人件費をそれ以外の費用より集約的に投入する経営しているが、フィリピンでは逆に人件費以外の非費用を人件費よりも集約的に投入する経営を行っていた。

本稿の以下の構成は次の通りである。第 2 節ではカンボジアとフィリピンのマイクロ金融機関の経営を記述統計的に説明する。第 3 節では分析手法を説明する。第 4 節では包絡線分析（DEA）による計測結果を説明し、第 5 節では主成分分析（PCA）を用いてマイクロ金融機関の経営特性について検討を加える。第 6 節は要約と結論である。